

関連学会印象記

ASA 1989 Annual Meeting に参加して

劔物 修*

1989年アメリカ麻酔学会 (ASA) 年次総会は New Orleans において、10月14日-18日に開催された。会長は Houston 大学 Galvestone 校の James F. Arens 教授がつとめられた。New Orleans Convention Center と Hilton が会場となったが、1万人以上の参加者とあって、どの会場も会員とその家族であふれており、市内の主要なホテルは学会関係者で占拠された状態であった。6年振りの参加であったが、会の雰囲気はこれまで感じていたものと同様に、世界のトップレベルの学会であるという意識が主催者側にも参加者側にもあった。

今回はこれまでになく多くの一般演題の採用があったこともあり、日本からの演題も参加者も例年になく多いものであった。ちなみに、一般演題数は1986年586題、1987年677題、1988年914題、1989年1204題であり、今年は抄録の長さが従来の半分になっている。ASA の一般演題採用率は3割位とされていたが、今年は少しゆるくなったと思われる。しかし、学会関係者はレベルは下がっていない、年々会員が増加し、応募演題数が増加しているからであると説明している。いずれにせよ、日本から40題位の演題が、そして私共の施設から8題の演題が ASA で発表されたことの意味は大きいと考えられる。

学会の内容は、御承知の通り14日、15日は refresher course lectures があり、2日間で83のテーマで、それぞれの権威が講義するとあって、どの会場も満席のようであった。循環に関する

ものは、23テーマ (27%) があり、主なものをひろってみると非観血的循環モニタリング (Barash)、経食道エコー (Cahalan)、虚血性心疾患患者の術前評価 (Caplan)、人為的低血圧 (Cottrell)、不全心と麻酔 (Hines)、カルシウム拮抗薬と β 遮断薬 (Kapur)、周術期高血圧の治療 (Miller) などがあり、特別目新しいものではなかったが、それぞれ最新の考え方を含めて講義であった。Refresher course とは別に clinical update program が16日に行われ、15のテーマで講義があり、このうち循環に関するものでは、心臓手術の麻酔 (Kaplan)、冠動脈疾患に最善の麻酔薬、麻酔法はあるのか? (Merin) などの5題 (33%) であった。循環に関するテーマに興味をもたれていることがうかがわれた。朝食パネルディスカッションは ASA のサテライトソサイアティである小児麻酔、脳外科麻酔、教育、テクノロジー、クリテカルケア麻酔、などが16-18日の早朝7:30-8:45に行われていた。臨床フォーラムでは小児麻酔、産科麻酔、肝腎疾患、心血管などが取り上げられており、心血管のセッションでは Iowa 大学の Tinker 教授がユーモアを混じえた司会で、会場をわかせていた。その他にパネルディスカッション、ワークショップがあった。一般演題は前述した様に1204題が採用され、循環に関するものは、もちろんほかのセッションでも関連するものは多いが、プログラム上で明らかに循環と区分したものは、循環 (臨床) I. 血液凝固と開心術 (8)、II. エスモロール (12)、III. 血管拡張薬、Ca 拮抗薬、新しい麻酔薬など (12)、IV. 人工心肺中の脳血流と脳機能 (12)、V. 経食道エコーなど (12)、VI. 大

*北海道大学医学部麻酔学講座

動脈遮断, 高血圧(12), が口演発表であった. その他に臨床ではポスターセッションに31題と全体で99題があった. Experimental Circulation では, I. カルシウムと麻酔薬(8), II. 心筋虚血(12), III, IVは種々雑多(12), V. 不整脈(12), VI. 肺循環と右室機能(12), が口演発表であった. このセッションのポスター発表は31題であり, 全体で87題であった. 小児麻酔のIIIでは心血管トピックスとして12題があった. 器械, モニタリング, 技術テクノロジーのセッションがもうけられており, 9つに分けられ89演題が口演発表, 27のポスター発表があつて, 約1/3は循環に関係するものであつた. 一般演題の1/5位が純粹に循環に関するものであり, 麻酔科学における循環の問題がいかに重要視されているかが理解される.

多くの演題が多くの部屋にわけて行われるために, すべてに参加することは始めから不可能である. それぞれの分野に興味を持つ麻酔科医が集つて, ゆっくり時間をかけて討論することがこの学会の目的でもあるからである. たとえば, Merin 教授 (Texas 大学) が司会され, 教室の仲田がセボフルレンの心収縮性について発表した循環 (基礎) IVでは, Lynch, Rusy, Shimosato, Lawson, Eger 教授などのこの道の権威が集まり, 激しく

討論する様子は, 若い研修者にとってはもちろん, 私共にも大変勉強になるものであつた. これが ASA の ASA たる所以でもあろうか. 若い研修者は興奮し, 発表や質疑応答に多少もたつたとしても, 同行している指導的立場にあるものが援助すれば, それなりに評価されていたと感じたのは私だけであるまい. とくに Merin 教授は勉強家であることもあり, それぞれのトピックスに適切な質問やコメントをしていたことは, 日本の学会でも司会をすることが多い立場の者にとつても非常に参考になつた.

会期中に各大学の麻酔学講座が主催する日本という同門会的な会合も盛んであつた. 教室から横田が留学していた関係でアリゾナ大学の会に出席した. Brown 教授は挨拶の中で, 今年の ASA にも沢山の演題を発表できたことを喜び, これを維持することを若い人達に勧めていた. あとは, まるで忘年会の様な雰囲気の会であつた. これも ASA ならではの物かもしれない.

明年は Indiana の Rechar H. Stein 氏の会長のもとで, Las Vegas で開催される予定である. 次回もまた参加したくなる気持で帰国できたことは大きな収穫であつた.

* * * * *

* * * * *

* * * * *